

難民のために、難民とともに

www.japanforunhcr.org

With You

JAPAN FOR



UNHCR

国連UNHCR協会

国連UNHCR協会ニュースレター「ウイズ・ユー」

2022年6月 | 第47号



緊急報告

ウクライナ人道危機

特集

気候変動と難民

「今世界で何が起こっているのか」

ウクライナ近隣国での活動

ポーランド

- ◆ 現金給付支援の登録： **60,969人**
- ◆ 救援物資の配布： **120万人**
(毛布： **110万人** 防水シート： **17,200人**
ソーラーランプ、寝袋： **各10,000人**)
- ◆ 国境や通過地点でのモニタリング： **9,488人**
- ◆ UNHCRヘルプサイト(難民向けサイト)による支援・情報提供： **300万ページビュー**

ルーマニア

- ◆ 対面や電話での情報提供・カウンセリング： **14,141人**
- ◆ 現金給付の登録： **2,679人**
- ◆ ブルードット(女性と子どもの保護施設)設置： **7か所**
- ◆ UNHCRの事務所の設置： **3か所**
- ◆ モルドバ国境からルーマニアへの難民の移送支援： **10,372人**
- ◆ 救援物資の備蓄倉庫： **3か所**

モルドバ

- ◆ 現金給付支援： **42,807人**
- ◆ オーストリアやドイツなどへの移動のサポート： **1,275人**
- ◆ モルドバ政府への物資提供
石けん： **20,000個**
生理用品： **15,000個**
毛布： **8,000枚**
赤ちゃん用品： **3000個** など
- ◆ ブルードットによる支援： **6,446人**



難民の現金給付のための登録(ワルシャワ)



難民を移送するバス付近でサポートするUNHCR職員



ドバイの備蓄倉庫からモルドバへ到着した救援物資

難民のライフラインを現金給付で守る

家の隣に爆弾が落ち、3日かけてポーランドに避難してきたロザリアさんと息子のアンドレイくん(2歳)。母国に残っている夫とは連絡が途絶え、必要な物を買う現金も不足し、UNHCRの現金給付のための登録を受けました。「冷蔵庫は空です。食べ物をくださる人もいましたが、恥ずかしい思いでした。できれば自分自身で買いたいのです」。



UNHCRの現金給付登録センターで登録を受けるロザリアさん親子

子どもや女性の支援拠点「ブルードット」

UNHCRはポーランドやモルドバなど6か国でユニセフと連携し、国境など避難ルート上に、「ブルードット」という安全なワン・ストップの支援拠点を設置。様々な情報を提供し、ソーシャルワーカー等によるカウンセリングや法的支援を行っています。子どもが遊ぶスペースもあり、親と離ればなれになった子どもの保護も行っています。



ブルードットのボランティアとアクティビティをする難民の子どもたち

緊急報告 ウクライナ人道危機

ウクライナ西部リヴィウのバス乗り場で、家族に別れを告げる父親

これは本当に、この21世紀に起こっていることなのか——。2022年2月24日に始まったウクライナでの軍事行動は、平和だった町を破壊し、罪のない子どもたちや女性を含む多くの市民の命を奪い、甚大な被害を出しています。ウクライナの国内避難民は800万人、国外に逃れた人は630万人を超え、第二次世界大戦後、ヨーロッパで最悪の難民危機となっています。軍事行動の開始以来、大変多くのご支援をお寄せいただき、心より感謝申し上げます。ウクライナや近隣国で今日も続く、国連難民高等弁務官事務所(UNHCR)の援助活動の緊急報告です。

※この報告に掲載されている情報は、2022年5月現在のものです。



この地図上の名前や境界線は、必ずしも国連の公式見解を示すものではありません。

ウクライナ国内でのUNHCRの援助活動

ウクライナで1994年から活動するUNHCRは、状況の深刻化を受けて支援を大幅に拡大し、現場へのアクセスが困難な中でも、8か所の事務所を拠点に約150名の職員が活動にあたっています。ウクライナにおいては、人道援助団体のリード機関として

①保護活動 ②シェルターと援助物資 ③キャンプの調整管理の3つの分野の支援を主導し、政府やパートナー団体と連携して、命を守るための緊急援助活動に尽力しています。



3月、ウクライナ北東部のスームイで物資や食料、医薬品を届けるUNHCR。最もアクセスが困難な地域の1つで住民は数週間孤立状態にあった

- 現金給付支援のための登録 **331,000人**
- 初回の現金給付を受けた人 **166,300人**(1人につき月額75米ドル)
- 国境や受け入れ施設等での保護(情報提供や心のケア含む) **170,761人**
- 受け入れセンター等の設置 **73か所**
- 破壊されたシェルターや家屋に関する支援 **23,400人**
- 最も激しい攻撃を受けている地域への支援 **64,954人**
- ポーランドからの緊急援助物資の輸送(毛布、温かい衣服、防水シートなど) **トラック127台分**
- 物資の提供(衛生用品、毛布、マットレス、就寝用マット) **422,130人**
- 砲撃で最も影響を受けている地域への食料の配布 **1.5トン**
- 就寝場所の新たな設置・改善 **46,488か所**(163施設)

「この連帯を、すべての難民へ」

「ウクライナの人々、動物たち、自然をこれ以上傷つけたくありません。不自由なく生きられる私たちに、何ができるでしょうか」(支援者の方より)。同じ思いを抱えている方も多いのではないのでしょうか。今、同じ時代を生きる私たち一人ひとりが、この問題にどう向き合うのかが問われています。

“ ウクライナでの戦争は、莫大な苦しみを生み出してきました。それと同時に、世界各地からたくさんの勇気と寛容な心が寄せられ、思いやりの行動へとつながりました。もしこの危機がさらなる大惨事になるのを止めようとするのなら、罪なき被害者たちへの支援を続けていくことが重要です。そしてこのような連帯は、すべての難民危機に向けられるべきです。—— フィリップ・グランディ国連難民高等弁務官 2022年3月24日の声明より抜粋 ”

気候変動と難民

過去に例がないほどの豪雨や台風、洪水、記録的な猛暑、干ばつや砂漠化――。

気候変動はこの時代を特徴づける人道危機であり、災害による人の強制移動はその最も壊滅的な結果の1つです。すでに世界中の多くの人々が気候変動の影響を受けている中、もっとも不安定で紛争の影響を受けやすい国に住む脆弱な立場にある人々が、不均衡に気候変動の影響を受けています。

難民や国内避難民、無国籍者などUNHCRの支援対象者は、まさに気候変動の最前線にいます。彼らの多くは気候危機の真ただ中にある国に住み、多くの場合、今後いっそう厳しくなるであろう環境の変化に適応するためのリソースが不足している状況にあります。

私たちは、猛威を振るう気候危機の被害を防ぎ、弱い立場にある人々の命を守るために、今すぐ行動しなければなりません。



アフガニスタン南部ヘルマンド州で広がる干ばつ

 危険な気候のため、**1秒につき1人**が避難

 **難民の90%**が気候的に非常に脆弱な国の出身

 紛争などを逃れた**国内避難民の70%、難民の40%**が気候的に非常に脆弱な国に避難

今、難民支援の現場で起こっていること

モーリタニア：山火事



© UNHCR / Colin Defosse

南スーダン：洪水



© UNHCR / Elizabeth Stewart

ミャンマー：洪水



© UNHCR

グアテマラ：雨不足による農作物の不作



© UNHCR / Ruben Salgado Escudero

カメルーン：チャド湖の縮小と資源をめぐる戦闘



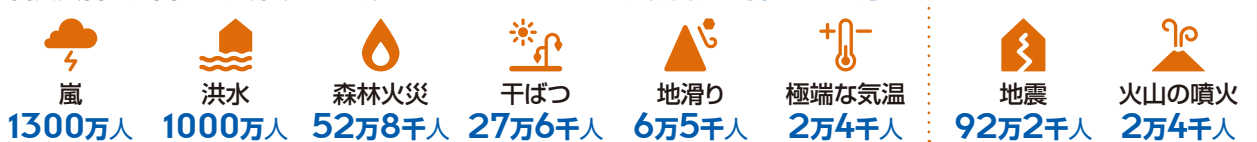
© UNHCR / Aristophane Ngangane

エチオピア：干ばつ



© UNHCR / Eugene Sibomana

自然災害に起因する避難（2019年）



気候関連：計2390万人

UNHCRは、なぜ気候変動対策に取り組むのでしょうか

難民の保護を使命とする国連機関・UNHCRが気候変動対策に取り組む――それはなぜでしょうか。

世界各地で起こっている干ばつや豪雨、洪水などの災害は、自然環境や生態系を破壊し、食料・水不足など命を脅かす事態につながっています。今や多くの人々が、紛争や迫害だけでなく、気候変動の影響で避難を強いられており、故郷への帰還の可能性を減らす要因にもなっているのです。

UNHCRは、難民と受け入れ地域の人々の暮らす環境と生活を守るために、災害の予防対策から災害発生時の緊急対応、水や衛生施設などインフラの改善、環境の保護に至るまで、様々な支援を提供しています。

UNHCRの活動における優先事項

UNHCRは避難を強いられる人々を減らし、また気候変動の影響を受けにくい世界を目指して活動します。



保護

気候変動の影響や災害で避難を強いられている人々とその権利を保護する



準備

難民や受け入れ地域の人など、脆弱な国の人々が気候変動の極端な影響に対応できるよう準備する



適応

避難を強いられた人々と受け入れ地域の人々が、自然環境を守り変化する気候に順応できるよう支援する



エンパワーメント

避難している人々が気候変動に対し自らの解決策を作りだせるように支援する



予防

気候変動を含む、強制移動の根本的な原因に取り組み、将来の強制移動を最小限にする



温室効果ガス排出量の軽減

2030年までに、UNHCRの二酸化炭素の排出を2010年のレベルから45%削減し、より安全な世界となるよう貢献する

気候変動とUNHCR —— 世界各国での取り組み

アフガニスタン

世界で最も災害の多い国の1つ

アフガニスタンは世界で最も災害の多い国の1つで、長年干ばつや洪水に苦しんできました。約40年間テロや戦闘が続く中、2021年はタリバン政権に変わって情勢がますます不安定化し、国内では約340万人、イランやパキスタンなど国外に約220万人が逃れています。2022年には人口の約半数が深刻な食料不足に直面しており、厳しい状況になっています。

UNHCRの対応

右の写真はUNHCRが北部マザリシャリフに建設した水のタンクです。このプロジェクトでは戦闘から逃れてきた200人の国内避難民と帰還してきた家族に飲料水を提供します。また、地域の道に給水場を設置し、不衛生な水に起因する感染症を防ぎ、衛生環境の向上をはかっています。UNHCRは各地で太陽光パネルも導入し、土地の灌漑に活用しています。



避難生活を送っているテントへ水を運ぶ子どもたち



約170世帯が避難する村で、UNHCRは水の供給、道路などインフラの整備、シェルターの提供などを実施している

エチオピア

電気のない難民キャンプにクリーンエネルギーを

エチオピア南東部ソマリ地域には、干ばつと暴力を逃れ、隣国ソマリアから約16万人が避難しています。しかしこの地域もまた、気候変動の影響で著しく乾燥しています。降雨量の減少と土壌の質の低下は牧畜や農業に深刻な被害を与え、人々は水と食料不足、貧困に陥っています。ソマリ地域の5つの難民キャンプでは電気へのアクセスが限られ、冷蔵庫も使えず食料を保存できない状況でした。

UNHCRの対応

UNHCRとIKEA Foundationは太陽光パネルを導入し、難民と地域の人々にパネルの管理維持や修理などのトレーニングを提供。各キャンプで約60人からなる協同組合を作りました。組合は電気を販売することで収入を得、貧困に苦しむ人には無償で電気を提供しています。このプロジェクトにより、難民と地域住民の生活が大きく改善しただけでなく、人々の自立生計支援にもつながら、尊厳の回復にも大きく貢献しています。



ソマリ地域で続く干ばつ。多くの人々が家や家畜、農地を失い避難を強いられている



共同組合のメンバーで、太陽光パネルを点検するファトゥマさん

「協同組合に加わったことは、今までで最も良い決断でした。私は自尊心を取り戻し、家族の健康や状況も改善することができました」
—— 9人の子の父親、ソマリア難民アリさん

バングラデシュ

難民と連携し世界最大の難民居住地を守る

気候変動の影響で、より頻繁に深刻な災害に見舞われるようになったバングラデシュ。モンスーンの季節(6月-10月)には豪雨が約90万人のロヒンギャ難民が暮らす居住地一帯に降り、洪水やがけ崩れが発生して住居を破壊し命を奪ってきました。また、多くの難民が調理用に薪を伐採して森林破壊が進んだり、トイレ等衛生施設が不足し、屋外での排泄など不衛生な環境に起因する感染症の危険もありました。

UNHCRの対応

UNHCRは難民ボランティアを養成し、難民と連携して災害に関する啓発活動、緊急時の対応の訓練、被災した人々の救助等をサポートしています。また調理用のLPガスを提供して薪の伐採を減らし、道中で起こりやすい性暴力や、薪を燃やすことによる呼吸器の健康被害の防止にもつなげています。



UNHCRは世界の難民キャンプで最大のし尿プラントを建設し、一日に15万人の排泄物の処理が可能に。各家庭の排泄物をプラントに送る際、ボランティアが大きな役割を果たしている



2021年7月、モンスーンの豪雨で洪水と地滑りに襲われた難民キャンプ。1万2千人以上の難民が影響を受け、約2500戸のシェルターが破損した



災害への注意を呼びかける難民ボランティアチーム。チームは緊急時の初期対応を担い、2021年の洪水の際にも多くの命を救った



薪拾いの間、子どもたちの世話ができず困っていた4児の母・ハミダさん。LPガスの提供を受けて薪拾いが不要になり、薪の煙も家に充満せず呼吸が楽になったと話す

私たちは、一緒に変化を起こすことができます

紛争などのため故郷を追われた人、気候変動の影響により命を脅かされている人を守るために、UNHCRはこれからも難民や受け入れ地域と連携し、活動を強化していきます。地球の未来は、今を生きる私たちの肩にかかっています。ぜひ一緒に、取り組みを進めていきましょう。



「私たちはすでに気候変動の破壊的な影響を目のあたりにしています。私たちは一緒に変化を起こすことができます。あなたの助けが必要です」
—— UNHCR気候変動特別アドバイザー アンドリュー・ハーパー

モーリタニアでの植林活動(前列右から2番目がハーパー)

今号の表紙



2022年3月、イタリア・ファネッティの国境で、戦闘を逃れスロベニア経由でウクライナから避難してきた人々を乗せたバスを迎えるUNHCR職員。難民へ避難の手続きやヘルスケアに関する情報を提供し、水や軽食も配布した



東京マラソン2023チャリティについて

2023年3月5日(日)開催予定の東京マラソン2023チャリティでは、チャリティランナーの募集が計画されています。本チャリティを通じていただいたご寄付は、紛争で故郷を追われた難民の子ども・若者の生きる意志につながるスポーツや教育の支援に役立たせていただきます。詳細については確定次第、公式ウェブサイトやSNSでお知らせします。

国連UNHCR協会は、東京マラソン財団チャリティ「RUN with HEART」の寄付先団体です。
<https://www.runwithheart.jp/>

WithYou

国連UNHCR協会ニュースレター
【ウィズ・ユー】
第47号 | 2022年6月

発行
特定非営利活動法人 国連UNHCR協会
[国連難民高等弁務官事務所・日本委員会]
〒107-0062
東京都港区南青山6-10-11
ウェスレーセンター3F
Tel.0120-540-732
Fax.03-3499-2273
www.japanforunhcr.org

編集
国連UNHCR協会

デザイン
NDCグラフィックス

印刷
凸版印刷株式会社

©Japan for UNHCR
本誌掲載記事の無断転載を禁じます。

私は子どもの頃から人と同じことをするのが嫌で、「日本人だから」「子どもだから」などとひとくくりにされるのが苦手でした。入団していたボーイスカウトを通して経験した、チームワークや野外活動、「備えよ常に」*という姿勢などは、今のUNHCRの活動に通じるものがあると感じています。大学に入ったのは、冷戦が終結しソ連が解体した頃でした。「これからは平和な時代になる」と思ったのも束の間、湾岸戦争や、ルワンダ、コンボで内戦や民族浄化が起きました。緒方貞子さんが国連難民高等弁務官として活躍されていた時で、UNHCRのことを初めて知りました。イギリスへ留学後、UNHCRの職員と話す機会などがあり、縁あって働くことになりました。

*「いつ何が起ころうと対処できるように準備を怠らないように」というボーイスカウトのモットー

駐日事務所では、2006年から主に資金調達、政府機関との調整、NGO等との連携等を担当しました。東日本大震災後には被災地で活動したり、2016年にはウガンダへ緊急対応チームの一員として派遣されたり、東京オリンピックでは難民選手団をサポートするなど様々な経験ができました。駐日事務所勤務が15年となり、さらに経験値や能力をあげるために、思い切って外に出ることに決めました。現場には、元は難民だったり想像もつかないような経歴の職員がいて、「難民支援は仕事というより人生そのもの」という人もいます。そうした環境で視野を広げたい、東京とは真逆の環境で挑戦したいと考えました。

今は南スーダンで、資金調達、ドナー国等への報告書作成、現地視察の調整等を担当しています。南スーダンは世界で一番新しい国ですが、誕生した瞬間から満身創痍のようなもので、ありとあらゆるものがあります。5人中4人は貧困層です。また、3年連

From the Field

難民支援の現場から

25

小坂順一郎 こさか・じゅんいちろう



南スーダンのマバン難民キャンプにて

続で洪水が続き過去60年で最悪の被害となっており、新型コロナやウクライナ危機の影響により経済は悪化し、人道支援が行きわたらない可能性も出ています。常に国内のどこかで紛争や災害が起きているよう

な状況で、人々が自分自身の国に「希望」を感じられるような支援も必要だと感じます。

先日コンゴ民主共和国からの難民の女性に会ったのですが、彼女は看護師で、1人で17人もの子どもを育てています。UNHCRなどの支援で借りた農機具で農作物を育て、その収入で自転車を買って貸し出したり、女性グループでパンを作って販売し、得た収入でミシンを買い、制服制作の契約を交わすなど、エネルギーあふれる姿には感銘を

受けました。

一方で、ウガンダで活動した時のことも忘れられません。南スーダンから毎日2千人以上が続々と国境を越え逃れてくる緊急事態の中、支援の歯車を回すのに精一杯で手厚い支援は難しい状況でした。5年たった今でも「もっとこういう支援ができたのでは」「あの人はどうなったのだろう」と、支援しきれなかった人たちの顔が浮かびます。

UNHCRは、難民がいる場所に必ず職員を派遣し、一緒に考え共に苦境を乗り越える、現場と難民・国内避難民に一番近い国連機関です。命を救う支援から、教育や女性支援、生計支援に至るまで、「人間」に関わることはすべてやる。それがUNHCRの総合力であり強みです。故郷を追われ家や財産を失い、今まで培ってきたものをすべて失った人々が、再び人間としての尊厳をもって生きていけるように、UNHCRを通してご支援いただければありがたいです。

プロフィール……国際基督教大学・大学院卒。UNHCR駐日事務所に資金調達、アドボカシーとパートナーシップ構築を担当、現在はUNHCR南スーダン・ジュバ事務所にて准渉外担当官。

6月20日は世界難民の日!

2000年に国連によって制定された「世界難民の日」。紛争や迫害で家を追われた難民や国内避難民に思いを寄せ、連帯を表す日です。今年も「#難民とともに」をキーワードに、避難を強いられている人々に音楽で「生き抜くチカラ」を応援するイベントを開催します。詳細はこちらから! <https://unhcr.will2live.jp/>



© UNHCR / Hanna Qasab